特 1
1956

国立国会図書館　タイトル『牡丹道知辺 2巻』 請求記号 特1-1956

ガラス使用

抑草木の花ハうつくしき無量あれども
心ある好士騒人これやうたよみし古
亦乃てたる人を愛するさかりにて
さらにあるにあらずやされバ春花咲
不言しいまでよそにてそれハめでたきもの
り是ハ中にも牡丹を唐にハ開元
のころよりしとやいつまれと花鳥数寄
此国にてもなにても是を植翫

まかなはれぬ事もなきをりのわざ也
或人あまたに此牡丹の多くの花をもとめ
世にしられたる物ともあつめ数々の花をもとめけるが
今ちんらしくかゝりける下品の花に似
いと見つらふをくらき去年をおくるも
栽培ふ心とよ人々ならずとも
後に枯し如何なる名のある花も
元来のまゝにたゝへしもおぼろけならぬ功みにて

うかつく花の作りを心をつくし實
植えさして多く栽さく試て精
こゝに手入をなし得る種も人にこれ仕覚
ゆゑ事の作のいさゝかにも中々
一筋なる論をくるにたかはぬ事なか
此たゞも我より問来る人もあまたは
年来すなはち唯きかれ花葉園に
何事にも植へしあらはしを書つゞる

特1—1956

国立国会図書館　タイトル『牡丹道知辺 2巻』 請求記号 特1-1956

ガラス使用

いさゝかこれは道知辺となりし是を
綴るは花牡丹を接木なと作中
よりも見つけたるむねしるしむら
かゝるこそやんごとなき御方よりこそ
けふその花盛りしてもろ見ゆ
さもそさけるは聖人は梅まさ
唯美なるは体つき花やかなる実
極めたるやしき玉容なりと外

録なしもなかるは三五十種数をとき
晩よりて皆そのかたちに咲出る文
翌し春は嵐を避けたれとも
桜雪より霜にも雪寒艶の枝
姉は麗無にして花をうちみだるゝ
蝶と舞ひ侍る世に龍梅入るゝ
くるしきところにて錦繡き
さもやとして他の花をなどし給ん

乃こされ侍るいつくしきやさしきはかなさを
人の心なすやさしき哉いはれたるむ
を捨るはまことに宗祇法師
蛍のくかなしかくて情みて問来る
人までに見をはる事もなし一旦は
押しやられしといふ心くるしくとも
人の情(なさけ)すてられしも捍たるまや
後の代の宮女のくれ情なきすなり人とこ

といつはかなくすしも見をちらし紙
いふはそあるを又遍昭(へんぜう)の手毎より
折毎に旅しはかなくそまうしに人の
為よは折ても幸人を猶欠如世はへ
色をき此ゐ如くぬいへ人の乃
こあなれいやはきも古人の詠よりよ
こゑゆかりこえゆくそうしよ
惟紅白世心此事をもらしてつきぬ

此代は書紙費へしとこそ鳴呼
人のあさまし世のさかしらは牡丹花に八
まさしく其愚なるをそしれと此書を
綴るゝかしこに極るはしかあらへ

播陽散人枚岡氏
梅隠軒

宗閑

一 牡丹乃名之事
二 牡丹紅白好悪見分之事
三 花かさねの事
四 花の實好悪之事
五 花の蘂之事
六 花形之事
七 莟乃こと
八 葉之事 并 葉にかゝる花の変

九 葩之事
十 葩れ根付のる事
十一 木ニ強弱有事
十二 花ニ位有也と云事
十三 諸方牡丹花盛之事
十四 木芍薬之事
十五 牡丹吉祥之事
十六 外れ名ニ同花色之事
十七 同名ニ外れ花有事
十八 葉にて紅白并上中下花を見分る事
十九 并河之事
二十 少牛之事
廿一 叢植様の事
廿二 接木の事
廿三 花種并蒔様の事
廿四 古乃事

廿五 紅と白と唯別に植るの
廿六 接木生え育く事
廿七 寒さを凌るの
廿八 本紙洗ふ事
廿九 牡丹開花日覆之事
三十 引幕せん事
卅一 実植 并 分子初咲之事
卅二 牡丹當年花失といふるの

卅三 白子乃事
卅四 分子の事 并 植替之事
卅五 根をおろす法のるの
卅六 實乃取様之事
卅七 実植くるの
卅八 子を取木に接穂育事
卅九 牡丹絶方小を植くるの
四十 牡丹根紙湯につきくるを知るの

四十一 取木の事
四十二 接木の事
四十三 牡丹接木の事
四十四 牡丹枝の接様の事
四十五 かゝゐく木の事
四十六 小木に薬の盛やう之事
四十七 枯木さか枝之事
四十八 灸治之事
四十九 枯る木は夏之土を可見事
五十 秋の末冬の初薬を出し木のる事
五十一 葉を切事
五十二 鉄紙忌事
五十三 鳥の防様の事
五十四 猫木に虫の付事
五十五 蟻之防様之事
五十六 蚯之防様の事

五十七 切蛆取植え事

五十八 切花のこと

五十九 花見んとする事

六十 牡丹を白木紙唇事

六十一 黄猿之事

六十二 牡丹を雌雄有こと

六十三 牡丹に名を付る事

六十四 牡丹智あふこと

六十五 牡丹異名之事

六十六 牡丹和哥連誹に用る異名のこと

六十七 牡丹紅白上花之名大概記之事

一 牡丹の字を書て其牡丹の事を
成へし丹の字ハあかしと読ハ赤き色を
紅花の称也白き花咲たるを白牡丹紫
に咲たるを紫牡丹とぞ云なれバ又紅牡
丹とも云も紫白よりかハりて丹をあらはし
たれバ重宝すべきなりといふべし本草ニ
時珍曰牡丹以色丹者為上雖結子而
根上生苗故謂之牡丹とあれバ元来

紅なるべし鮮花品は中に又牡
丹第一とされて世に花王と称する
なり

一 才二

毛好人ハよくされとりん知べしされど多
と近ごろ専ら園にとくて名花におるされハ
中々りん気うとし此ん知ゆるものなし
ても年にわたく出来ぬ家来あまたは
かるく手妙へさしあつれ哉ハ白に淡

かるゝ肥色ゆ故也紅に黒う出るゝハ
薄色乃種なれどもこれも賤く肥色ゆか
故也むかしは糞しもする事無しや
ゆるか草に秋冬移接の壌土至
春盛開其状百変故其根性殊失
本直とあまりて色劣り花弱まり
むかし又云雨繁き年ハ紅色少薄し
と知べし

○上花なる色重(かさね)實(み)蘂(しべ)形(かたち)茎(くき)葉(ゑう)艶(えん)ふ
して艶ありて深(しん)なれとも上品をえらふへし
○色ハ紅白なれハ強く蘂(らい)しくみえるを
黄紫よしとれ咲かゝる時ハよしとても
早くさめるハおとろへを發まく色を失
ふ事を第一とせり此魏家(ぎか)なる
紫牡丹ハなつしびなるさ名花なりしも
此の今も紫なるさまにハりんなる人なし

姚家(えうか)乃黄牡丹此ありしを今はわれなるを
とも蘂しく真なくしと云ふ人々寰ぞり
薦黄牡丹と名付(なづけ)る有色々木棉乃
花に似たるとかさね落し或ハ白ニ紫
此花入をなる所也前唐(たう)の明皇(めいくわう)の時
牡丹を献(けん)する者有貴妃(きひ)其時ありそと
そのふるに睛(そうし)らに有紙もつく毎
上苑(ゑん)卯を栽(うへ)しやうに来(らい)歳(さい)花昇て

国立国会図書館　タイトル『牡丹道知辺 2巻』 請求記号 特1-1956
ガラス使用

如此迹をそれよりは一捻紅と名付給ふ
今洛陽に此名を呼事あまた数かハね
又韓湘子が瑠璃盆中に碧玉
此色の牡丹に似たる花を咲せけるも仙術
なれハさもあるへし又宋此単父と
云し人は種藝の術を得たり牡丹数
千種を変せしかハ上皇勅して
驪山に牡丹万株を植しむるに花咲て

まちまちなりて美なりしかハ是より其
呼て花神と称し又花師と名
付給ひしとかや今家ニ紅白紫
数々の色あるも凡玉紅粉楊妃牡丹なと
もふくらは雪花朧月葡萄紫袁なとこれ
外もまたいろいろ色も揚ちこれそし色わ
と云花種の彩り間精くも想てもたん
青黄赤白此四色まじへ黒色に及

いんとされハ黒ハ北方の色なるにして
陰也丹ハ花なれハ丹を内より出来る
要路ならすとつゝしみ外より色とあ
らハれ事なれハ花衣へし世に黒牡丹
とハもいふ牡丹にて種れなし牛に
異名也著麿玄といへる劉訓と云し人
繋二水牛一庭前指日此劉訓が黒牡丹
也とされいへし牛ならバ名なりとそ

重とハ世界あり一重八重ハ千重万重もや
此内八重ハ千重とよとに一重ハだ
す万重ハ数ありし又盛よろしく葡萄葉咲
矢倉咲といふ二種の中にハ細き花
出ルが蕊下界也丸葩又葩より十又六よ
及とも一重をし廿葩より卅葩
より及ぶと八重として花にかハりてより
花ありて百葩を花ふりくと千重として百葩

○咲といふハ万重と云へし
重数かきらぬハ本よりよく綻（ほころ）ふ時
肉つ面入て蕊くきらかりて両入さる花
有るべし自然両入そろハよく実る
と落へし吹掛てもよし
一 實（みのり）ヶ種子ハ赤き実よし白きハ悪るきよし
いつれも小粒子（べに）なるを上とす白牡丹ヶ
青き実なるも赤く黒くなるも有べし

高はやよし笠陽より出し花は袖の内
といふ白き實の出きたれども花包花
紅なりよく上品とす其外へハ桜の
葉也牡丹紀も實裂（さけ）るに裂るは実紅
中一顆たれども花芯のありゝも上
品とせり九品桐桜鳩牡丹花も中品
一同二つ此雅（え）ハゆるれ実の色よもそろへ
をかへし實は小く被まけろとよしとす

大みじく破るゝと嫌ふ

一 才又 蘂ゟ是も實を用ゆべく紅ハ
紅色白ゟゟ白也とよしとす總くかき
にして蘂ぞ實をつみて乱をさるを
捨ぞれとん背りしてたゝ花ゟ乱
あり見ん若し

一 才六 花形ゟ紅ゟ少小輪まくもよし花大
輪と思きしきつるは花ゟ白紙小輪八ゟ

しかうす大輪を貴ともろく五角にし咲
出して志らも底も花ぞくよくかくつく
強を上とす冨貴比絣たぞよろし或ハ
弱く乱れ縮尖捌盃の末は色形よく
とし癖て菊咲とのふハ莚とらづつよろ
極しくかくて悪し蓮華咲と
いふは志ようたそくして悪し何ともゆ
ゑにおうやう小咲ぞるを上の花形とす

一 廿七
茎(くき)ハ伸(のび)やかなる所よりしたゝ緑(ろく)く弱き
ハ悪し弱きものハ添木して花形横(よこ)より
なる也花より心持付べし茎緑うく咲ハ所
紋(もん)咲(さき)とて嫌ふなり

一 廿八
葉ハ碧(みどり)色と常ありそるよし或ハ縮(ちゞみ)
弱くして葉先ハ悪し柔く厚きよし
春と夏ハそれより通ふ笹葉(さゝば)なきハ嫌ミ
紅色あくなるみえありて葉先なり上にハ

ゆのゝ上なる葉よく〳〵切るべし
葉先の伸(のび)色くなきハ少し切(きる)べし又
在ハ弱き葉はつみん切ハ読ませし伎念

○ 葉の中にかくれたる花のみて出事を
葉をとりて花の見ゆるやうに出しやる
くし大木より継木をするもあり

一 廿九
蕾(つぼみ)ハ紅白ともにふくらみて先(さき)の色さよし
咲(さき)先(さき)より継接ぎを上より寸切まハしも

餝なしと云ハ是也　蹈碾のことく花は
喰きれたる如く白き小蕊也　蘂際を
限とす紅の色内へ入さされ下品也
○豊なる咲なれ共花厚し蕊すくなきも
又豊し　紅白ともにあり　紅ハ大木
色とれのこゝろあらく見ゆる也

一　根付と云て紅白ともに小花多く咲るよ
牧丹思ふにあるく紙媚ふ白牡丹よ女なるを

醉とも濃ともいふ是ハ蕾の時霞
初ころ白くありてあかくきれたくましす
色を付れ共咲来てさるかハむし
させ出云也　但花も秋まで霞ハ紙紅
露を受てよし　又紅も元来になづ
きてのきわにありの又赤き番異しなる
木にて花にかれ付ても出る事ま
花角紅にハ番異しとせるなとよし也

才十一

一 木ハ強弱をさとく人ハ花河なとしきを
つくしてなんべり上り伸るを紀
事ある事なり又乙子（おとこ）江山（こうさん）なと偏（へん）
一ゆたにて上を伸安しきるに強（つよ）くて
差（みぎれ）曲あるハ弱く見ゆるなれと天下（あめがした）小
漆（こゝと）の類也

才十二

一 [illegible]の位とてよろしく優（ゆう）なりみゆれ

大様成をいふへし

才十三

一 花の盛ハ大かた立春より九十日より
下花乃よれハ十日も早く咲わる也
一 国の内にても少の遅（ち）速（そく）あるなり
洛中都外（ぐわい）二日の遠差南都ハ五
日遅し 勢尾の両国八十八夜の比
大坂あたり[illegible]駿府ハ六七日も中
紀州哉前ハ七日遅し 播州摂陽ハ

国立国会図書館　タイトル『牡丹道知辺 2巻』 請求記号 特1-1956
ガラス使用

氣候同じて京にハ二日もさかり
我國ハ五日もやし
一　才十七
木芍藥といふも牡丹の事なり
沈香亭乃木芍藥なり一枝両及なん
色開く物なりハ深碧となり紫色
深黄となり薫粉白にして甚妖怪
なる未今もあり双頭なり咲なりさその
花者多くハ吉兆なりとしその咲所

一　才十五
或書ニ牡丹錦さかへたる家ニ金花
化現して吉祥なりと言ふ瑞とあり
りすとや
一　才十六
別名多く同花なる前にも并河
倉橋家深き天の元来君子なる
木色ハ昔ハ出来し判物す大きなん
上方ニ化不ニ有る同色也と中らや
至りかり七夕ニ入物日玉柏含利

なしこれ絶味なりといへとも木乃痩肥によりて花乃かたち乃様にみゆる事もあれハ也
是又同色なる物といへとも色合赤白にも出替あるを心をつけて知へし

第十七
一 同名なれとそれハ植別成けり 更科 羽衣 吉田 閑寺 山本 あまたハ有名ハ聞これと花色 紅白上下此花の出るを見るに呼来る名所の紙を出して後にいる名

なれハ又同名より出る紙呼流くに名付ケ有 江戸舎利 尾張舎利 小日向 淀朝日 京にも鶴白 楊蔵朝日 江戸外記 京外記 尾張外記なとの数也 此外にも何ほとかあまた

第十八
一 葉をとみくそれの紅白上下をもみかるころ常此事にてそれハ遠くにさるその名れと自然より此の葉は一ト遠くもうる花木の葉の来るもよれ人とも古人の

根撥(こんはつ)とりんとく花まへころ下を知るは
上文枝葉(しよう)をよくしるは次の文蓓蕾(ばいらい)とて
出るハ下しと見るときも肯へる事なよ
しるそ

一 第十九 并河類ハ三年とも花咲るハ植
替てよしよく肥付くハ木肥るにより
花より見ぬを出るゆへ肥るこる本にハ根
え(もと)なり蓋たし肥取ると入るゆまさハ根多く起

少切りてよし

一 第二十 小丹ハ其大木ハたわくなきなりしされとも
ち蕾甚色よろし而して八花の根より出る
出るく枝ハ見えれとも其る有かる時ころ
人擂(すれ)ともこ見ゆるもの枝のへるなり何れ
花も甚しいれ毎年いつまても小丹也
植ゑ肯まるゆ十えわるも叢(つぼみ)多くハ花の
中ちいさ花をこの数ハ母のゆくもり人合

国立国会図書館　タイトル『牡丹道知辺 2巻』 請求記号 特1-1956
ガラス使用

ゑりて接色しおくべき芽あるは
快きなる一輪をのこし事なし葉際(しべぎは)を
節より切入てる花もかじりて見べきは
蕾(つぼみ)あれども時々残る芽の勢を絶て
花根付悪しく肥をよりなる土無し吹出
し法愛早くして同うりて是ハ気を
一 又新芽を存して其花ある日々或ハ一日おきに
覆いし住けたく大きなる物ハ不耳

たハ綻ひてよき花をよく咲出しろ
ところハ余れ紅気の及て見事なる物也
一 オサ一 蕾(つぼみ)を取事しきやくすれば八重豊満
になりかず枝を付べしと此所にて八
蕾なるにおよびてかれ
一 オサ二 接穂等ハ八月下旬より残暑薄く
八九月毎より夕薄冬ても接るなりや
冬も名根前に畑に氷(こほり)張りて根がれ

出しかくし置て枯たる用に根ばかり出し
其所ハ土肥く葉も少しばかり出るを惣て
白牡丹などハ殊にやうやく成長もなし
然るに伸しかねて枯たるもましやらし凡
樹を植るには郭橐駝が術を旨
とすべく植べし天気よき日をえらぶべし
大木にて根も太きものハ二三年もかゝり
古株なるハ年をへて少し中高り

たるハ株をよく根の土も払ひへ土を入べく
根先をさけてらの小木ハ日を見へ植るべく
其あとの土も沙しら無根より出かたち色し
根たまき方を南にむけてうへし杉やうなる
下ハ地をく池にもよく葉もよく毎年新
分子よく芽の出たり少し霞すべし
根元ハ日あたりよく日陰に植べし
其れ寒中には出いてもかまへりのせ

一 花壇は地形より五寸ほども高くしてよし
り惣水たまりつく所ハ心得あるべし
乾湿をよくかんがへし 紅りハ湿を嫌ふ
湿事流よき所よくハ根くさりて枯る
枯る事も有へし
○花壇乃幅ハ木乃大小によつて定むべし
中ぐらい木ハ一間半計りにしてよし 小木ハ
少人よりも此花壇にハ二通りも植益

割ものゝ後よりしつらひて花壇ハ同一所ともに
咲事あやし 日張白壁に映りて
蒸故也
○踏石ハ幅広きハあしゝ 履比植と石とある
八寸程別し 継目ハしつらひよく 都合よくすべし
踏石ハそれぞれに人の気に入る様を見合せて
いなく人なしか
一 去ハ入口そのこゝみ砂利かゝりて細流紙

国立国会図書館　タイトル『牡丹道知辺 2巻』 請求記号 特1-1956
ガラス使用

一 オサ五
夏乃中ハ水をあたへる事をせさく用ゆ
紅白別ニ有り準をかてうつるりも
有り白紅その手入かハる事あれハ紅ハ
様子乃もよし又紅白様逸一準有り
ましてうつるまて色ともめして也此时一入

兒本ハ大物をも此手入心ハまうへし

一 オサ六
瘦木ハよくよわき織ハ合せてしめんとて
養ひをよくつくすの事よろしからん

雨水の頭至る〳〵白紙ほと〳〵小便をもまし
うすり寒ゆへに根をとへすに入てかくるよ
却して肴つくる木よ糞を畑へ膠なとも
少しもよ絡し

一 オサ七
寒を凌ぐ事為糞紙根よあて入れ
寒風此雪なと此所にふくハさしむへき
陽風にてそをかしきもし又寒中に
無比表を切合て根りよくとよく覆ふる

国立国会図書館　タイトル『牡丹道知辺 2巻』 請求記号 特1-1956
ガラス使用

よしやかくれたる葉を取てもよし寒
強く吹いく時ハ下をとりハちよりぬくへし
ひくきたる石なとを重かよし本ニ霜
覆する事よろしかられ木健なられ
さくされ日覆よりし寒暑より小木ハ
あつくよりし極寒極暑ハ葦簾紙
にて覆よし寒ハ囲ひよく大雪なとに覆くハ
枝折乃ありされハ覆をへし大雪より

覆落て牡丹折るゝ事まゝありや
心得あるへし
一 本根深植事 葉落て後雨降によ根
ゆるみなきやう小柳乃籠にして苔を落
まへし浅くて後根の実をとるへき布
ふつくんて池の土を掘て地ならし
よし砂此池をそもくし本立ちうへ
しくなりく苧すれ作一入様と如

物也作さいくりつくりて後ハ痛
みも強くなれハ心をとくる也しあらハ
さほ本まて西の葉小さく悪し
一 第廿九
霞色に肥する様子ハ移りよく
されも一入色わけて能見え
其色日氣肥弱を細くして
花痛事なれハいつしと見る何なん
霞とる是なるく住するハよしとなるは

ちりぬれハ悪し尊く霞とるハ花なれ
たりもちえしき物也心得べし
一 第三十
花種なる引幕ハ成ハ紫成を黒き
下ハ青きよし赤白共二色ハ好し
めでたく〳〵

一（分式一）實ハ植りうくるに本ニそてし初く花
咲まても色能それをりんてうハやゝく切
庵し葉もよく本りをく入くれ入く
本まそく時ハ必実蔵さく無物之穂多
きれ乃切様ハ手に豆り乎ありそ吾
まわ上の葉と一葉残して切くよし
去る時ハ其乃おゝく才勢よく好くり
やとくして本り痛なく照りすへ支

にくも誰しも初戦の頃よりて人
のもみんなするやゐ盛なく本に残る面
まりわ豊年はさらぬ也けんとしてさる
人初さきは少其表さみをの様なる
さきなる様ろる物はゆかれなる大
みして本ともいさ紀の痛事也

才恋二

一 牡丹の萌芽と表とゑ付るもの人毎
なりといふものなといふすとえてす

盛人云生養の氣をわけして夫といふ
もやわし志るは夫といふゐは余のわろく
の萌芽(ほうげ)より通をくしとりはなは牡丹
乃子の親(おや)木のもしよわ去年くより生
出で附て新しく恰(わう)して夫頭(ざんとう)より似る
ゆへ名付の衆へし是れ以の物を
続きる百出るとありて其れ哲(てつ)人の
物りなり付るまで其の形(かたち)をもりてすゐ

第六十三
一 此類出来しむ實なく是ハ失とかるゝ
地中にはひりて芽をかくしたる芽を白
子とふりかけそして根あまりハ切たる
様てよく洗ひ乾し芽かゝりて頭より
細成砂をかけて庭の北曲物をとらせ
寒中は霜雪を凌ぐ曲物の中
いてあつゐやうにして悪し蕃枝葉ぶ
秋さる施し能よ芝れ时白子なくとありて

第六十四
一 残玉时のそとあたゝか
分子極る日受に比而より根かか比
而と日と受る毎に中花の色へると其有れ
末ハ少ふくも極也根もとも日受されハ
小根出ふく根がるを去と花のち当
ならわ少なせて極施し
○ わかわかある子ハ様よふせて古き合せ
ニまかくわうを比常に去をうけおき子

石をのぞくも根をおろして後かゝるよし
去りかゝるきを悪みかくハ双方ともに
痛たるや
○かふくきまてわたおろして根をあら
ひよく洗てよくその節をみて方へし
去りかけてハ色かへて梅なる事多
し毎しかる根一節をもちて髭根も
あらはきさわて大くく枯る物也

一 才六又
枯たる所を去て細根去但し入にまじよ
ある所をいかにも悪きハ砂も好からんて土斗
麦の糠(ぬか)に干うちを二升雑(にとう)乃糞粉を
しく三升灰(えい)を升右よくつき合せ
俵に入五日を経て用ゆる也去斗よて
はつきりして痛也
一 才六六
實を取事大きなる盆なとへ六月に
ころ入未熟(こ)にして悪しからん色除き

そうりとられてよし本より有時実に虫気
つくりあるときハそこし病つきそうか色
種子になりは皮の外へ虫の出んりうハ
生るハそれと去年て虫をとるべし
實をとらんとおもふ木ハ花を切る事也
実おほくのなる木掃るれハ也花のは実
よ成とおもふけれとも紙見えて秘り出
をとりて接へし実とる十ちる木ハ以痛

みれハ咸きと痛有木の又ハ小木杯ハ實とと
られる事也

一 實接おほくもれの絶接る人にて
秋とおもふ一所とりて又若きを
事を出よひ白紙打る附ハ木くるあり
て生かぬる事也 白牡丹紅実をおくにて
紅とけらして接る事にハ人さんおの実
又そ池りつきて〳〵る人もおの玉端より

接木人ハかしかそれハ虚りけるへても
よし手後よりへ入くハ実に痛やさし
然時ハ砂と埴をこねて合せ漿紙
にて巻く竹と押よりあてゝも乾かつ
さるやうに折くを紙を巻くし
又一粒つゝ蛤の貝へと覆てとく
人もあり是を植るくハ貝乃中に土と
盛あけて土と実と紅ひくをみ首

そもしても少も生る物たうれ哉
生さ内ハ雛芒ハ浮かき必生るたるを
古様よくしくて其秋へ入くるし
古端も接ても細微砂紙入実へと
たゝへ娘さなして地に埋て置きて
来ぬ為にハ但古端へハ秋ぬ接岸
色く接色し早くて入春ハ来るのび
まそく接穗ハ悪し春乃接岸色

より地に移してよし花に生まくつる
よし地より生ずるものはかならずよ
はくみゆるなり日をとりてひろへて置
着にくくはつはへし二季從秋まで
一也ましまよう出へ多九と夏中手入
よろしきは實入色のよきなりしも
咲をかわらし三ヶ月てもとをふるよし
一まきてをそく遠ざけまし候也

一子はつ出候木をよつて成猶うれしくは継
強弱をえんかぬへく出へし弱木なるは
出候色の寸亦強木なりはさゐてい
りして余花の枯る木にハ出来なり
ふさとろく人あるは花のその新木なるん
あるかりいまうしろ寸数木よりく
く出るにいえやまの絕くとうに思し
たるにかかくる矢へとそをとく一世へし

わかつ記を志かく分つ時ハ二本共
に痛む子にわかれ生年ミもろともにかれ
大事成年めに分るなり二三度も
きは親木共痛也惣して親木に
付きし時も大かたハ二三年めにハ花もなく
物ハ新年分ちて別して年くらし残す
あるを実生よりたてるは云ありてかかる事有ると
痛もなく弱し老木よりハ子出るなし

若木よりハ出やすし子出る前ハ極暑
時分痛あるに子ハ親出候也寒にもよく
根を痛めぬやうにハ子を生ス
一 第六九 他所より牡丹裁来たる時ハ封の内より
取判見て年の下に書付にて記して
捨ぬ植よろしく海漆ともに嵐ハ親
去ぬる大しめるかわを植木の元に添
分ひまき荊棘など取りて続くよ

てらし竹ハたゝに黐をつきてはさみ
とらし此黐牡丹より付時ハかならず嵐
牡丹ハ枯きしるゝなり此ハ甚痛物也
一 才口十 人ふよりて牡丹を見る時ハ貫求
る時ハ客なる人根より湯ひけ枯る
やうにて偽を饒るゝ事はな湯漬
と云て根やりかゝりて去る物
見ゝ事延すへし柔をめりけらんハ根よ

孫汁と指見ゝ枯たる時ハ珍日以鳥
賊骨鉞具樹ニ必枯と首而さみれハ
とれ庭たるもより妙果をとしてとも
秋ニ至く取りつらん時鰍乃甲と
墨云てすりませ二分口りめるも
一 才四上 地もしる枯る物ハとそりせやし
一 取木此事ハ箱乃見へ挽き合せ入
若の貂を切りてにへき枝の附へ

能仕かけ風よりうごかぬやうにして
よし枝は古木にかゝる事下ハ紙行燈の
ごとくあつかひ紙をつり膠とかし一重にく
くり箱乃ふたへ瓜の下少切りとくりと三
度ほど見合切くし葉あさく緑
仕かけてより開くより根とすれ
九十月比は根よりみて花種より極へ
痛有木ハ永来もなく候

一 接木ハ九月上旬よりすりても台と穂
とあはしふさき脈紙縄に接際とも此
赤土にふくく泥を塗し季草にて秋冬
より移接をもし此れハ唐土にて接きす
次第とも見へてなさす

一 牡丹は指木にするかず挿木ハ根を
付けすもあり目移りよく根たか梔子
乃枝まく芽をまきぬかりてその下へ

牡丹の枝を指入候ハゝ六七分
も出して少しなりとも葉の
しつ葉有へし
一（正月中）芽かけて出る牡丹ハ枝の如くとして
去年の所ハ秋冬の中芽をとりて
挿へし土深くハ枝枯るゝもあるへし
又其年の芽をそのまゝ置へし
○
枝のせりたく添て置ハよき所へ接

手入り本を当てゝ乃ちうやうにすれとも
引きあへて川岸て茲て生延し
自然とよくなるも
一（正月中）本の所を如けるハ小深く本附るまて置
すち其下よりも根を切接するもあり
此ても接生へし
一（正月中）小木の葉茂りたるは風より吹折るゝを
られぬく根より其接するもよし行と

立てゝ四方をかこひてよく〳〵つゝしむへし
枝はさへし東西風は吹とさむる也

第四十七
一　枯たる枝はつゝむやうに切へし　枯枝はまた勢をとられてよわるなり　枯際か殘りても枯れかゝり根入て痛むゆへ強くさのかやうに切て油煙をぬりて置へし　木立もうつくしく成なり

第四十八
一　枯うらは末に葉居とするもあり

いつまでも花見へて咲人稀てよく〳〵葉居あまる花もつはしとする葉末八をまの根もとを寸より上か地際より上くく〳〵寸法をさりて葉末をもち
艾（もくさ）一壮（そう）りとくよう妙也と云伝へ事ぬ

第四十九
一　枯たる木をわきし根を見つして思りて五月を待へし白子か首〳〵

第五十
一　秋の末冬の中に葉を出し人あるを

紙をおほひして芽をまもらハ悪へし
肥をしたる木ハ文痛ある事にて盛ハ
早く葉ハ枝切たる木にも間有へし
一葉を切事大事秋乃彼岸より
は切へし見合三度に切るへし又
秋白牡丹ハ六月より切也冬白牡丹
ハ七月比より切るへし中ほとよく切也
其時ハかならす葉をしとも葉をまたく

切葉しむせさる時ハ花枝さかねハ
いふ冬白牡丹と云へるハ寒をまつり
咲かぬる花ハ十月霜月に咲せ
冬に成より世より寒牡丹といふ也又
日ざし又悪雨風にあたりあつき雨悪し
春も咲ぬる花は蕾になし咲せさる
ハ悪し冬牡丹咲をも為たる
もの咲て葉を切もしてよのまヽを

落しおかるし一蓮咲ハ早く摘紙
切べし早咲とあるハ大真(たいしん)佐(さ)よ
雅なとの類也清滝(きよたき)乙子(をとこ)ハ遅く咲
是等も早く切ハ来年ハ成花なん
少しやく覚由

第五十二
一 鉄を焼ふと云るハ本草ニ汉銅刀(どうとう)
とは茶葉株を掘る時もいむなれハ
生木にも牡丹にハ戒しもいへニ手旗

第五十三
一 鋸(のこ)錆(めくさり)小刀ホどを銅を用べし
一 冬春也中刈る錫(すず)牡丹の寸紙
吟味すあるも是雞頭白紙など
張るに虫ををるかへし

第五十四
一 鎖本にハ必見(み)ゆ虫(むし)と云物生るゝハ
一 波下(ふく)にハわつく見てかへし早く
洗落して油をぬるべし
又月前ハ葉にも蓑(みの)虫といふ

物並ひく付るのみに大に痛を成し

一 第五十五 蟻乃つく事黒砂糖を根に付おき集りたるを幾度もすへし蟻穴に抹香を入るへし

一 第五十六 蚯ハ春雨の時小便をくれハ雨りつきて土中より出て花の根を損る

一 第五十七 肥多きまゝに切蛆生して必牡丹の茴芽を切損し庭なし也曲物を茴芽に

うつすてと見るへし

一 第五十八 切花ハ剪法ハ早朝にきるへし切口ハ焼よく焼て水に漬へし炉なきハ火ハ大氣もりとりて急し他所へ贈るなれあらハ花を小枝取り包みて乱さす様にして紙の上中切口をよく蕾を遁すへく露の葉にて事つゝみくもへし 花ハ花紙よりよせを

叢て横になしてむするをはさ
切花をいけくきにすまはさ花
節にすうしたゝてハ焼て(しそ)はさし
盥過てあろ花紙つゝもん事なれ
白ハ切花一入揚る紅ハきわく見らん
出る事あるを切それハ西風あれ秋
あきハ庭に出し直くし秋氣を受て
ハ花ひたりら強し出す牡丹ひ花

ろかされすふもあくすよりくこゆる
それハ豊紙あつき湯につけて極ろ
本極へし
一 才五十九 花りんすろ事 物めつ時より七つまて
よし一まり猶色よくハ悪し行人もんし
まへし 幾度も立てゝみんてるし花
色紙付るもしあるへし
一 才六十 白牡丹ハ根より白木とふりの紙

蕾ひらくる時ハさながら花半金色に咲と
なりしゆゑ是を金田とも出車ともいふ
白本を持し一歳に百目程に
具なれり又七度かくのことし
一 才六十一 黄蘭といふ牡丹ハ紙より色うすくぬれ
なり白牡丹ハ蕊を包て色開けし
と一日より廿日迄右ハこしらくる時ハ
花蕊の色ハさくらなり 古の二條右此花也

にあるよし或人かたりき
一 才六十二 花より雌雄を論する時ハ白ハ雌と
し紅を雄とするとも又たがはず美人
にこれたとへ付る事なり心有人ハまよハ
一 才六十三 牡丹にはそれぞれ好みあり或ハ以名以色
以別以色以地又宜賓貴敢和哥へ
心をとゞむる事あるべし 欧陽脩が花譜
より所載九十余種を出せるも如是

国立国会図書館　タイトル『牡丹道知辺 2巻』 請求記号 特1-1956
ガラス使用

あはれ唯やさしきに悴ややすかれ
けりあはざる紀りのと
一 (才六十七) 花持を自他ともに珍重と賞翫するは
見さむまし鉄常人よりも猶更
こゝ本末ありとそれと云まいつれ
事なき様へ此時まで心をこめ
と是非なく大切成物ぞかしなりとも
極めしてそなたへ入べし 恐惶

間も鉢不知り成りかけ花咲きとも
知らぬ為なれば後日此難儀はいふまじく
ては叶ふ事なり猶それぞれ名残付く
皆常々竜好(すき)なる人もまた同じく
こゝ丈夫にして花と楽しみを慶べき
方よりとかくをや一生世人の秘蔵を
しまれなくて上方にて調ふる事は
かならず名を残遠くかへされなりと申を

漢の樹なりかつて彼らの花ハ人の
無行跡をゆたり原本也然り
而しく手にふれをらんとく謂るもの八
色は時封を封也封乃人を行の
使まとく色恵くよし

一 唐土より名付る牡丹ハ異名多し
是るを書付侍る

花王 姚紅 姚黄 魏紫 天香 錦綉

蘭麝 裴白 妃肌 膩體 國色 醉態

妖姿 庭香 氷玉 玉盃 蟾精 雪魄

玉香 國香 檀心 綉囊 楊態 醉顔

鴨緑 鵝黄 姚韭 錦窠 仙髻 玉臉

玉貌 貴品 奇葩 異香 錦幕 紅衣

金縷 錦裳 玉佩 金盞 玉膚 雪萼

銀苞 氷肌 朝紅 玉容 露盞 風葩

錦腮 魏花 九蘂 眷紫 眞珠 牡氏

緋紅　馬紅　鼠姑　麁悲　欧碧　夜白
容紫　紀羅　貴容　花紫　午碧　丹杜
状元紅　水晶毬　酔西施　索家紫　蜒寿　鹿胎花
甘草黄　一撮紅　玉版白　醒酒花　酔妃紅　真別紅
紅二六　百両金　青別紅　午家黄　潜溪緋　尤別紅
葉底子　延州紅　鶴翎紅　朱砂紅　添色紅　十三紅
丹州紅　多葉紫　蓮花萼　一百五　細葉寿安　鹿葉寿安
倒暈檀心

一　才六十六　いにしへより和方にてもつはら連誹に用る
云葉
深見草　陳草　富貴草　鎧草　眠保草　名取草
廿日草　夜白色草　などにありて此花の
ゆかりと清少納言もかきつれ
一　才六十七　近来此上花ほくくし人乃好みにまかせ
しりやもを少あらうし作る
牡丹葉　蝸風　霞開　右三種を紅の三花と

いかゝ或人かうゑし花
朝日 舎利 手入 斧河 小車 閑松庵
禽橋 浅草 紀國江 見越
○白牡丹
桐臺 白妙 此両種ハ御園より若竜と
いへんのゝ世ゝ一入なる
出雲 氷谷 三國 是を白の三花といふ
仙臺 玉雲 清滝 越前 花庵 高田

松風 礒影 廣嶋 金枝 乙子 宿木
源氏 袖月
此外幾ノ百種志るさゞるハ猶あます
竜も人此花をおもてとしてわく能数す
うしや、多銘をつくかえれる花を
咲花待まゝのなかれ

ことにあそふ梅をみて中に一雪月花
詩琴酒をたのしみありいまの世人すこし
もみて敬くして牡丹をうつしへて
露とあそれと文紙をかきて友とする
木ありまことに我と物しまなれ
根おくされは兄弟あまたそのそこ
りし大志たく花も散れとも名附和の

或人のいへるハあるは小説などといふ
人乃あそびとなりし稗史寓言乃たぐひ
みな教へとして用ゐられたり草本
うりふきしれうつまとみよさへたまふね
あるは新話りかきるやうに李氏
梅氏と伝りえも名家に出ねいを情を
和らくしやおそれやおりひえその好

この書とはなしをしる(ね)人ハおこたりし
へ志る人ハよくしれと今枝思梅後将
乃ねがし梓にちりばめて世にひろけむ
とすゝ好閑録是着閑録
元禄十二乃とし陸月廿日青白翁
我黒跋

書林

梅村玉池堂
柳田好古堂
雙梓

特 I
1956

国立国会図書館　タイトル『牡丹道知辺 2巻』 請求記号 特1-1956

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『牡丹道知辺 2巻』 請求記号 特1-1956

ガラス使用